

## ■ ■ ■ 編 集 後 記 ■ ■ ■

今年の冬は、積雪は平年並なのに気温が上がらないため雪が融けにくく、結果的に大雪になってしまったといわれています。その低温傾向は春になっても続き、ライラック祭りを終え初夏となった今でも続いています。スプリングエフェメラル（春の妖精）と呼ばれる春の花たちをいつもよりちょっと長めに見ることができたときには喜んでいましたが、次第に農作物の生育が気にかかるようになってきました。気温が低くかつ日照時間も短い。冷害にならないければいいのだが、と願っています。

「シリーズ 21 世紀の新技术を展望する」も今号で 4 回目となりました。生物（なまもの）を技術の対象としている私にとっては、ようやく生き物が対象となるお話が読めたとほっとしています。柳川先生の「野生生物と道路—交通事故、生息地分断とその対策—」です。生き物相手の仕事は「計算」が成り立たず、どちらかといえば職人的な経験則に沿って進めなければならないことが多く、「系統的にトレーニングすることで人に伝えていくことができること」を「技術」と捉えるならば、技術とは言い難い場面も多くあります。それでも私たちは人間以外の生き物たちと折り合いをつけながら生きていかなければなりません。様々な分野の技術とコラボレートしながら、生き物と折り合う術も「技術」として展開できるようになっていきたいと考えています。

（第 109 号 編集担当 孫田 敏）